

### \* 研究目的

日本のゾンビ企業(追い貸しや金利減免などの銀行支援によって生きながらえている非生産的な低収益企業)に関する先行研究(例えば、Peek and Rosengren(2005, American Economic Review)やCaballero, Hoshi and Kashyap(2008, American Economic Review))では、邦銀による自らのバランス・シートの装飾が誘因となって非生産的な企業への追い貸し行動がもたらされていることの可能性が指摘されている。こうした邦銀によるバランス・シートの“ウィンドウ・ドレッシング(window dressing)”を重視する立場であれば、自己資本の毀損した銀行が自らのバランス・シート装飾のため、非生産的な貸出先企業を追い貸しによってゾンビ化させてしまっていることが、結果的に銀行と低収益企業間の関係を否応なく継続させていると見ることが出来よう。

しかし、最近の研究では、先行研究が指摘するような自己資本の毀損した銀行によるバランス・シートの装飾という観点だけでは、邦銀がゾンビ企業と関係性を継続していることを十分に説明できず、全く別の観点からの説明が必要であることを指摘している(例えば、Inoue, Nakashima and Takahashi(2016)やOgura, Okui and Saito(2016))。本研究では、なぜ邦銀がゾンビ企業と呼ばれる低収益企業と関係性を継続しているかについて最新の金融経済学上の知見と企業統治の観点から分析することを試みるものである。

### \* 研究チームメンバーと研究課題

中島清貴	経済学部・経済学科 教授	ゾンビ企業の金融経済学分析
尾形真実哉	経営学部・経営学科 准教授	ゾンビ企業の組織行動分析
高橋耕史	日本銀行調査統計局 カリフォルニア大学 サンディエゴ校 経済学部	ゾンビ企業の統計分析